

「今月の1枚」



絹皮病（きぬかわびょう）

薄暗い林の中に気味の悪い白銀色をした木の枝が垂れ下がっています。これは *Cylindrobasidium argenteum* という糸状菌（カビ）が引き起こす絹皮病という病気です。

この病気はその姿から昔より「山姥（やまんば）の休め木」という名前で知られており、関東地方南部から沖縄にかけての常緑広葉樹林に分布しています。

（写真，文：松本剛史，高知県大正町市ノ又風景林にて 2004年4月22日撮影）

絹皮病はすぐ近くの樹では、罹病（りびょう）した枝が垂れ下がり、健全な枝に接触することによって病気が伝染します。

罹病した枝をヒヨドリが営巣材料に利用することによって遠くの森林にも伝染することが知られている。鳥によって病気が伝搬されるめずらしい例です。

（参考：佐橋憲生著「菌類の森」 東海大学出版会）

（No.171 2008. 6. 3 掲載）